

まとう。この歌はそのことに気づかせてくれる。整然と「切り身」が当たり前に売られている状況では、欠陥や奇形といった異常の見分けがつきにくいものが多くなることに思い至る。現代人に警鐘を鳴らす一首。

56 十キロで三千元を切る米の出でし頃よりこの世乱れつ 馬場昭徳

米十キロが快い重さだという作者。米十キロが作者には価値観の基準としてある。そしてその十キロの値段には三千元の攻防がある。堤防が少しずつ壊れていくように安売りをする店が出始めた頃、この世が乱れたと言いつける。安さの競争が行きつく先は？「世乱れつ」と助動詞の「つ」を使う。「ぬ」ではない。そこに作者の意識がみえる。一九九〇年代後半、ネット通販などがまだない頃であろう。三千元の攻防からこの世が乱れたと言う作者。「乱れつ」は時代の先が見えない中で重要な発言なのだ。

57 時満ちて杏に小さき月生りぬ長き日暮れを千々に熟れゆく 峰尾碧

杏の木は、高さ三メートルから五メートルの落葉高木で樹形は梅に似る。六・七月頃に梅より少し大きい実がなる。実の色は月のようなオレンジ色。作者はその杏を長

い時間眺める。時が満ちて、杏が小さな実を宿す瞬間を見逃さない。そして夏の長い日暮れ杏の実が千々に熟れていく時間を作者は見守っている。杏の実と言わず、月が生るとするのは、そこに物語性と幻想性をもたすため。一首に流れる長い時間軸と、杏の実を千々にちりばめ熟れゆく空間。そのなかの一点で、作者は静かに眺めている。

58 百人の生まれ出づれば百通り生き方あり逝き方がある 長嶺元久

人と人との接点を大切にして、考え方が一人一人違う患者に真摯に対応する。作者はこのように考え、日々患者と向き合っている。「百通りの生き方」とは、人が生活をする上での日常のこと。具体的にいえば、家族・親子・思い出・趣味・読書・助け合い・嗜好・表情・言葉などである。そして作者はその人その人の日常を受け止め、その生き方に接しながら患者の「力量」と人となりを見極めていく。この歌には、それぞれの患者と真摯に向き合った何十年分かの時間が刻まれている。

59 落ち武者のわれかもしれず遠望の城が小さな鳥影となる 中西由起子

人間は、時代の流れや大きな自然の力に

翻弄される。七五年前の戦争。「平成」の度重なる災害。そうした中で人は救いを求める。「方丈記」「平家物語」はその一つの形。また人は「いかに生きるか」ということを考える。そして区切りをつけるべく自分の復興に努める。その時、ある意味ちっぴけな人間にも心の中で変化が生じる。作者もそのちっぴけな人間。その我が遠望する城はいつしか小さな鳥の姿となる。鳥の姿は救いか。救いは自分の心が生むもの。

60 ほしいまま大きくなりし冬瓜の身をひきしめてへた一つあり 松橋雅実

「へた一つ」に注目した歌。「ほしいまま」とは、相手の意向を無視して、自分だけ勝手気ままにふるまう様子という意味。そこからは無秩序・無制限・放任という言葉が連想される。しかし冬瓜は決して無秩序・無制限ではなく身が引き締まっている。作者は要諦と必要といった大切な役割を冬瓜の「へた」の存在で表す。そのユーモアのセンスが光る。人間にとつての「へた」とは何か？家族にとつての「へた」とは何か？この歌からはそうした思いを素直に出すことができる。